法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

テニスの謎

Kamiwazumi, Jun / 神和住, 純

(出版者 / Publisher)
法政大学体育・スポーツ研究センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学体育・スポーツ研究センター紀要 / 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要
(巻 / Volume)
25
(開始ページ / Start Page)
29
(終了ページ / End Page)
34
(発行年 / Year)
2007-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005057

テニスの謎

Mystery of Tennis

神和住　純

はじめに

テニスは、国内はもとより世界中で楽しまれており、主に、競技スポーツと生涯スポーツに分けられます、たかがテニス、されどテニス、技術・歴史ともに、大変奥の深いものがあります。

テニスのゲームから、「テニスのスコアの数え方が、何故、0－15－30－40－ゲームと変則なのか？この質問が一番多いのです。

何故、0（ゼロ）のことをラブと呼ぶのか？これも不思議である？

テニスのルーツを調べていくと、歴史が古く、15世紀頃で、テニスの原型が出来たとされ、スコアの数え方の質問に答えられる人はいなかったそうである。

そこで、以下のようなテニスの謎を解いてみました。

何故、テニスのスコアの数え方が「0－15－30－40」？
何故、ゼロのことを「ラブ」と呼ぶのか？
何故、40－40のことを、「デユース」という？
何故、「アドバンテージ」がある？
何故、「テニス」と呼ぶようになったか？
何故、「サービス」と呼び、最初に始まるのか？
「ラケット」の語源は？

私は、現役時代（テニスを始めたときから）、ルールやシステムがそうだったから、特にこれらのことに関しては、気にしていなかった。

しかし、現役を退いてからは「テニスには不思議なこと」がたくさんあることに気づき、私なりにテニスに関する文献をかなり集めたりして、「テニスの謎」を分析し、少しばかり研究も始め、解いてみたのですが、疑問が多い。

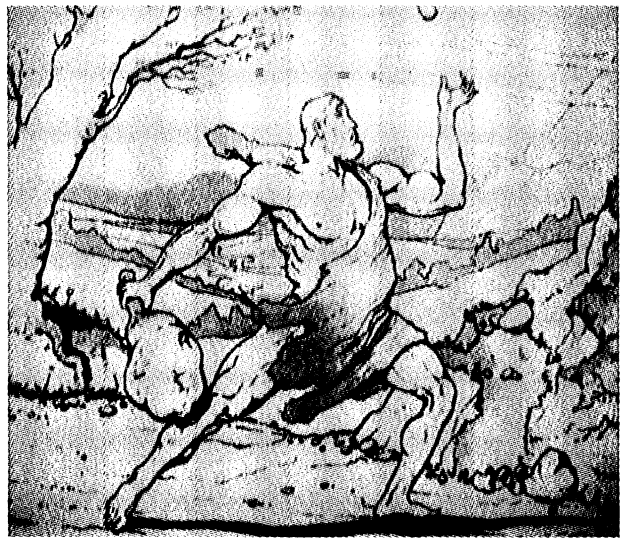
あくまでも、色々な説がありこれが「正解」であるとか、証明するような存在は見つからないままではありますが、テニスの文献から、当時の時代にさかのぼり、古代から現代まで伝えられてきた事柄を鑑みながら、自分の想像を交えて結論を考え出したことをまとめてみました。

テニス誕生までの軌跡

第1段階　未開社会（石器時代）

古代ギリシャ・エジプト時代（紀元前）

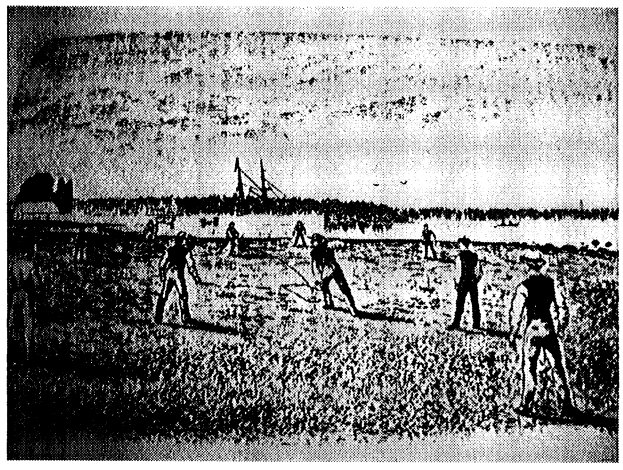
猿人や原人の社会で、人間は石などを「投げる」木のようなもので「打つ」といった、単純な動作であり、現代で云う「スポーツ」感覚で遊んでいたのではないか？



第2段階　古代社会文明（10世紀前後）

ラケットがない時代、素手や皮の手袋などで、ボールらしきもの（鳥の羽などを丸めた）、やその後、スーパーボールのようなゴムまりらしきものがあった。

「民族ゲーム」の時代、テニスに似た打球戯は、各地方に数多くあった。



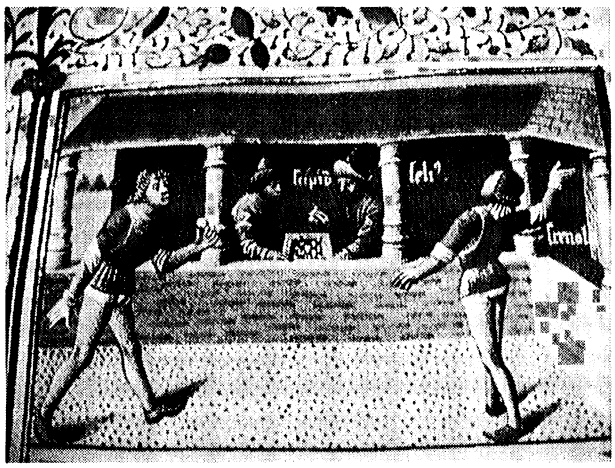
ゴトランド島のペルク球戯

芝草の上にセットした、白い長方形の枠（ペルク）をねらって、サービスを行う。

手のひらで打ち返したり、足で蹴ったり、テニスとサッカーがまだ分離していない。

第３段階　中世時代（12世紀～15世紀頃）

手のひらのゲーム「ジュ・ド・ポーム」優雅な雰囲気で貴族の間で流行した、修道院で考案されたともいわれ、教会の中庭や回廊や、城の中の庭にコートを作った。



15世紀のフランス語版にみる「余暇」
ジュ・ド・ポームとチェスゲーム

ジュ・ド・ポーム時代、ラケットが使用されるようになった。

16世紀ごろ、お互いにガットが張ってある、ラケットを持っている。
ボールも中に空気が入っていた。

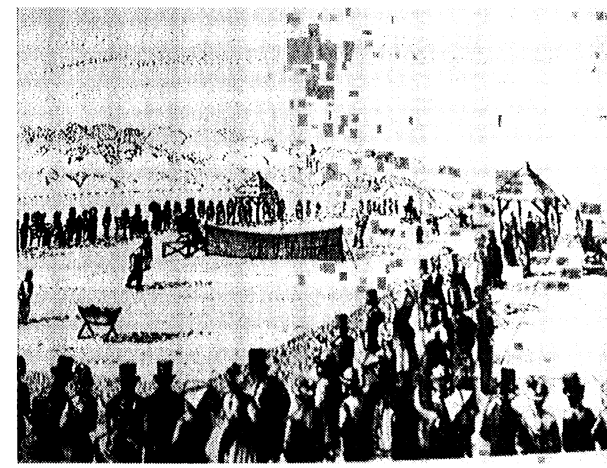
ルネッサンス時代の室内テニスコート（フラマン地方）、

中央部に見物人のベンチ、窓越しに観客がいる。
両コートの後方にラインが引いてある。
テニスネットが見られる最初のものらしい（1600年頃）
手前の人は、審判か？

第４段階　産業革命（17世紀～18世紀）

近代テニス（ローンテニス）が生まれる、ラケットの生産・ボール・ルールの統一でスポーツの興業・大会が開催された。

1877年、第1回ウインブルドン大会が開催された。



1877年の第１回ウインブルドン大会を見物するエレガントな観客たち
テニスコートの後方に、防球ネット（フェンス）がなかった。
このコートは、どうやら現在のAll England and Lawn Tennis Cricket Club
ウインブルドンのセンターコートと同じ場所のようである。
ウインブルドンという名前は地名です。

テニスの軌跡をたどれば、第４段階では近代テニスが生まれ、第１回ウインブルドン大会が、開催された頃は、既にスコアやルール、テニスコート等は、殆ど、規定など完成されており、現在とほぼ同じであるので、第３段階の中世時代から、第２段階の古代社会文明まで、さかのぼり「テニスに似た打球戯」や「民族ゲーム」から古い絵画や詩集、そのほか、当時の生活様式や人々の動作や言葉など、その他に社会的事情からヒントがある。

「テニス」のゲーム以前は「手のひらのゲーム」ジュ・ド・ポームと呼ばれ、この楽しいゲームはヨーロッパで大流行した、人々は賭け、罵り、喧嘩、論争、取っ組み合いなど、風紀を乱した。いつもの時代にも悪童タイプがいたようである。

ジュ・ド・ポーム禁止令が出されたほどであったが、しかし、人々は隠れながらも、修道院・回廊・中庭・墓地などの広場でこのゲームに熱中した。

当然、見つかれば、その土地から追放されたりした。

更に、見かねた司教は、この規則を破った修道士などを、懲罰や破門などを命じた。

当時、貴族は、後継ぎの子供達には修道院で社会教育をさせており、その時に「テニスらしき球戯」を覚えたのだろう。

その後、子供たちは成長し、やがて自分達の城に戻り、テニス施設などを作っていった。

テニスはどこで発祥したかも、諸説あるが、ひとつの説に、テニスの発祥地は北フランス地方ではないかという説があり、ほかには、修道院の中庭説もある。

Ｑ１　スコアの数え方

①　貨幣説

ゲームなどの勝負事には、何かを賭けることにより、人は大変興奮する、また、する人も見る人も夢中になる。「賭け事」としてヒントがある説が有力で興味深い。

この、「手のひらのゲーム」か「民族ゲーム」の時代の貨幣制度からヒントがありそうである。ジュ・ド・ポームの発祥といわれる、フランスの当時のコインは、スーやドゥーニエと呼ばれていた。

仮に１人対１人でこのゲームを始めたとき、先ず、第１ポイントをとった人は相手から、１つのコインをもらえた、それが当時の15スーというコインであり、その後２ポイントを連取し、さらに２個目の15スーを手に入れた、３本目も勝ち３個目の15スー、更に４本連続でポイントを奪い４個目の15スーを手に入れた、15スー×４個＝60スーとなる、60スーになると、その上の高い単位である、１ドゥーニエ銅貨となる。

つまり、当時の貨幣制度では15単位が１番小さい単位であったということで、１スーとか５スーなどのコインがなかった。当時の60進法の数え方がコインを４分の１とした。だから、15－30－45－60となり４ポイント取れば、近代で云うところの１ゲームと考えられる。

もうひとつ興味深い疑問に、45が40なのかは、英国に伝わった時に45（フォーティファイブ）と発音するのは、長すぎるので40（フォーティ）と省略したという。

当時の詩集から、テニスの掛け金は身分によって異なる、王は掛け金のリミットなし、騎士や従者は15スーまで、工夫や水夫はさいころ賭博や、賭け事の禁止という記録が残っている。

興味深いテニスに関する日記が残されています。

イギリスのヘンリーⅦ世のプライベートな、会計簿からの記録。

1494年６月13日：スペインのテニスプレーヤーに４ポンドの支払い

1494年８月14日：チャールズ・サマーセット卿にテニスで負けて、そしてロバート・カーンズにはボール代金を加算して、１ポンド７シリング８ペンスの支払い

帳簿には、まだ、負けの支払い記録が続いていると記載されている。

②　時計説

このゲームのスコアを数えるのに、時計の文字盤を使って、やはり４分割して、実際にゲームの時に表示したという記録がある。

１ポイントで時計の針を15分
２ポイントで時計の針が30分
３ポイントで時計の針が45分
４ポイントで１周し60分で１ゲームが終わる

60分の時間区分法、円の角度の分割法がヒントとなる。

当時の60進法は約数が多いので、多くの数字で割り切れる。

１年は360日とし、１ヶ月30日×12ヶ月に５日か６日を加えて１年とした。

全周角は360度。当時の生活様式では、円を利用した。

例えば、中世の時代、60進法では、60が１番上でした、フランス語は60まで独立した発音があり、70に関しては60＋10といい、80は４×20といい、90は４×20＋10と呼び、スコアの数え方として当時、成立していたのではと推測される。

③　修道院説

前項で述べたように、テニスらしき打球戯ゲーム（ジュ・ド・ポーム）は修道院の中庭でよく行われた事から、当時、修道院では、生活様式が15分単位で構成され、そのつど教会の鐘がなっていた、その生活習慣がテニス球戯の際、カウントを数えるようになったという説。

従って、スコアの数え方は大変複雑のである、500年も前から、ルールはあったと考えられ、近代のスコアへ繋がってきている。

Q２　ゼロのことをラブというのは何故？

① 愛情説

１ポイントも取れず０点は可愛そうだから、やさしく慰める意味で「LOVE」と表現をした愛情説がある。１番それらしいのにそうじゃないのが「愛」かもしれない。

当時、相手の裏をかいたり、打ち返せないボールを送ることは卑怯であり、騎士道精神に基づく紳士的なプレーが重んじられていた。

やさしすぎては、試合に勝てませんので、殆どこの説は取り上げられなくなりました。

② 卵の説

０（ゼロ）という形をどう表現したら、周りの人が見てわかりやすいだろうか？

０は、卵の形に似ているので、比喩的な表現をしたという説がある、テニスらしき打球戯が流行した中世時代のフランスでは卵のことを「l'aeuf」ロエフと発音したのが、言葉の発音の変化によりイギリスに伝わった時に「love」に置き換わったという「卵」の説。

イギリスの国技クリケットでは、打者の得点が０に終わることを「ダッグエッグ」アヒルの卵という習慣が古くからある。

ちなみに、日本では「０」を、「だんご」と呼んでいる。

③ ラテン語の説

11世紀には、ゼロという概念がなかったので、「最初から」という意味のラテン語「ab・obo」アブ・オボが使われた。オボには卵という意味があった。

④ オランダ語の説

ゲームをする時に、お金でも、愛のためでもない、名誉のためにゲームをする。

「名誉を賭けて勝負する」ことを、オランダ語では「omme lof」オンメ（～のために）ロフ（名誉）といった。

その後、イギリスに渡り名誉の「ロフ」の意味が、「愛情のために勝負する」に転じて、「for love」となった。

オランダ語から英語に転じたスポーツ用語は他には、Cricket　Golf　Porker Putt　Set等がある。

次の疑問、３ポイント対３ポイントでは40－40（フォーティ・フォーティ）、あるいは40（フォーティ）オールとはいわずに、デユース（Deuce）と呼んでいます。

デュース後、１ポイント勝負でもよい訳です。

そしてデュース後、１ポイントとったら「アドバンテージ」となり、２ポイント連続してとるとゲームとなる。

何故、デュース後、２ポイント連続して取らねばゲームにならないのでしょうか？

Q３　デュースとアドバンテージの語源

広辞苑で「ジュース」をカタカナで検索すると、次の２つの意味が出てくる。

１．Juice　　飲み物

２．Deuce　　スポーツ（テニス・バレーボール等）

発音はジュースでなく、デュースと発音するのは理解できたと思いますが、何故デュースになったら、２ポイント連続して取らないとゲームにならないかの謎は、詩集の中にヒントがあります、「45－45になったら、１本で決めるのは運もあり、本当の実力とは言えない、だから２つのチェイス（ポイント）を賭けて勝負をしなければならない」とある。

観衆は、デュース後、１つのポイントを取ったら「優勢」「優勢」と叫んで興奮した。

つまり、現在では「アドバンテージ・・・・・」である。

当時、原語では「Tvoordeel」と叫んでいた「優勢」という意味の言葉が、英国に伝わった時には、「有利」、「優勢」という意味で「Advantage」［アドバンテージ」となった。

昔のフランスのテニス試合でゲームが拮抗し「45－45」になった時、現在のテニスと同じく、勝利を手にする為には、１ポイントではなく、２ポイントとらねばならなかった。

言い換えれば、プレーヤーは２ポイント分だけ、勝利から遠ざかったということである。

現代フランス語で言えば、a deux (point) du jeu 英語に置き換えると、at two point from the game　（ゲームの終わりから２ポイント手前のところ）となる。

a deux は古フランス語では、a dues 「ア　ドウース」となる。これはラテン語で２つを意味するduoの複数第４格、duosから派生した形である。かつて、イギリスの上流階級では、フランス語が話されていたが、15世紀以来、次第に話されなくなっていった。そのため、古フランス語では、a dues という表現における、a はもともと、数詞　deux　（＝２）を伴う前置詞a（英語でいうところのat）だったのだが、英語の不定冠詞a（ひとつの）と誤解されていったのだろう。

a deus（古フランス語で「二つ手前の」）から、a dues（英語的に「一つのデュース」）、さらにa deuce（英語で「１つのデュース」）へと変化し、定着していったのではないだろうか、だから、イギリスのヘンリー公とその同国人たちは、それ以来ゲームがデュースの状態になると、I have a deuce と思い込んだのかもしれない。更に、テニスプレーヤーたちには、術語を省略する傾向があるため、時代が下がると、不定冠詞のａも完全に取り去られてしまった。(つまり、ただのdeuce！という表現に落ち着いた)

テニスはフランスで発祥されて、イギリスへ伝わったことが、又、証明されました。

全仏選手権では、いまだにテニスのスコアは「フランス語」でカウントされています。

「デュース」になっても英語はつかわず、フランス語で「エガリテ」egalite (同点) と言っています。(＝英　equality) (equal イコール)

実は、Deuceという単語は、フランス語の辞書には載っていないのです。

では、皆さんで、15世紀頃、中世時代の貴族になった気分で、お城の中庭のローンコート（芝生）で優雅にjue de plaum (game of palm)「ジュ・ド・ポーム」を始めましょう。

Q4　サービスの語源

まだ、ラケットがない時代で「手のひらで打つゲーム」は、ラケットの変わりに、皮の手袋をはめている、鳥の羽を丸めた皮製のボールを、打ち合うゲームで、コートにはラインを引くだけであり、次、ロープをはり、その後、ネットらしきものを張ったのだろう。

王様は偉いので、必ず身分下の下男（召使）がいて、ボールを拾っていた。

身分の高い自分の上司に対して、「どうぞこのボールをお打ちください」と心を込めてコートにボールを投げ入れた。つまり「奉仕の精神」で上司にサービスしたわけです。

その時に、召使は「はじめ」とか「いくぞ」という掛け声を発した。

王様は「よし」といって、そのボールを打ちゲームが始まった。

レシーバーは、「ui」ウイとか「wuplee」ブプレといった、フランス語で「oui」ウイ、「いいよ」であり、「sil vous plait」シルブプレ「どうぞ」の意味、英語では「yes」「はい」、「please」「どうぞ」ですね。

つまり、プレーヤーが自分で自らボールを打つ、サービスはなかったということになる。

サービスの語源は「奉仕の精神」から発祥した説が有力であり、古い詩集の中に、ルイ16世からサービス（奉仕）をして、15シリングの報酬を得たという記録がある。

その後、プレーヤーは第１球目を、石のサービス板に一度、ワンバウンドさせてから、相手のコートへ打ち込んだり、屋根などの「ひさし」に一度当ててから、ゲームが始まった、その後、いつの日からか、直接、相手のコートへ入れるサービスになっていった。

Q5　テニスの語源

何故、テニスと呼ばれるようになったかは、たくさんの説がありますが、「ジュ・ド・ポーム」時代に、召使がサービス「ボールをコートに投げ入れた」のときに、これからゲームが始まるので、気合を入れて「はじめ」「いくぞ」と叫んでからポイントが始まった。

その召使の掛け声は「Tenez」、ラテン語で「テネ」と発音した、この言葉が変化して「Tenee」「Tenees」「Tenir」フランス語からフラマン語を経由して、イギリスに伝わった時「Tene」から「Tennis」となったという説はかなりの信憑性があります。

当時は、色々な掛け声があったようです。例えば、サーバーは「いいかい、いくよ」といえば、「こっちに打て」とレシーバーが言い返した。

現在、サービスを打つときに、掛け声はありませんが、シャラポアのように「ウー」と大きな声を出すのは、中世の時代ならどう評価したのでありましょうか？

２年位前でしょうか、シャラポアの「グランティング」大声について、ルール上はいかなるものか、論議されたこともあります。

その他のスポーツで、掛け声からの習慣が、現在も残っているものがあります。

アーチェリーでは、矢を射るとき、「Fast」ファストと呼びかけて、自分の放つ矢に注意するように警告しなければならなかった。あらかじめファーストと叫んでいれば、万が一人に命中してしまったとしても、殺人罪で告訴されることはなかった。

ゴルフのティーショットの前の「Fore」フォアー、という呼びかけは、他人を危険にさらさないためである。または、打球後に危ない方向へ飛んだ時に叫びます。

当時、ボールゲームでも、これから自分が打とうとしている「サービス」に、対戦相手の注意を向けさせる「呼びかけ」はごく当たり前のことであった。

その他、信憑性にかける、予選落ちの説は色々あるようです。

1．テント説（ステファン・スキナー）
　テニスはテントの中で行われていた、フランス語の「Tente」の派生語
2．打穀説（イシドロ・ルントゴ）
　古代ドイツ人がテニス球戯を発明した打穀場「Tenne」を意味する古高ドイツ語「Tinnis」を持ち出した。
3．ナイル説（ウイットマン）
　ナイルの首都「Tinnis」が水没した、このチュニス地方でボールを生産していた。
4．シャンペン説（ジョン・モイヤー）
　フランスのシャンパーニュ地方のある村の名前で「Tennois」トノアという発音をシャンパンの飲み過ぎて、テニスを発明したという人が、発音を混同した。
5．穀物用のふるい説
　フランス語でふるい「Tami」タミから出た言葉、多くのゲームでこのふるい状の打ちつけ具を呼ぶ。
6．ネットの紐説（ウオーター・スキート）
　「Tainia」プレーヤーがお互いにネットをはさんで向き合う。（ギリシャ語）
7．10人説（ジュリアン・アーシャル）
　英語の「Ten」、昔のゲームは10人でプレーしていたから。

Q6　ラケットの語源

人類は戦いの歴史の繰り返しであった、キーワードは「城の奪取」からヒントがあります、城の内側と外側の戦い、城を攻撃する方が外側であれば、城の内側は守る側です。

城を攻撃する「Chasser」キャッセ　ケッセと発音するフランス語が、フラマン語に変化して「Ketsen」ケッセンと発音するようになる。

城を守る側の反撃「Ra-chasser」ラ・キャッセ　ラ・ケッセと発音するフランス語が、フラマン語に変化して「Ra-ketsen」ラ　ケッセンと発音するようになる。

「Ra」を付けると、反対の意味になる。14世紀始め頃は、テニス球戯のプレーヤーの「防御の一撃に対して、この言葉が使われていた。

フラマン語の「Ra-ketsen」ラケッセンがその後、[sen]を取って、英語の「Racket」ラケットに変化していき、15世紀頃、「ボールを打つ行動」となり、「ボールを出す」のではなく、「ボールを返す」という意味である。そして、ボールを打つ「道具」に転じた。

Reを広辞苑で調べると、「ラテン語系の語に用いて」、反・後・退・再・相互という意味があり、テニス用語は「ラテン語」の影響を受けていることから、RA－CKETは「反撃する」という意味であろうと思われる。

英語でもReから始まる単語は、反対の意味がある言葉が数多くあります。

Return Reform Regret Refuse・・・・・・

だから、テニスで「攻撃」されたら、「守る」のではなく、「反撃」するのである。

もう一つの説には、英語のrachetは、フランス語のraquette（発音は英語と同じ）からきたもので、中世ラテン語rasceta を根っことし、もともとアラビア語の「手のひら」を意味するrahaから借用した言葉のようです。

言葉の変化

ラテン語は、かつてローマ周辺で話されていた言葉で、ローマ帝国世界の公用語として広く用いられました。５世紀の西ローマ帝国滅亡とともに、話し言葉としては次第にもちいられなくなります。その後、時代が下がると、かつテニス民衆が話していたラテン語は、ロマンス語として地方ごとに発達し、イタリア語、フランス語、スペイン語、ルーマニア語などへ変化します。ですから、フランス語、イタリア語、スペイン語などは、ともにラテン語から枝分かれした言語といえます。

フラマン語は、ベルギーの北半分で話されるオランダ語です、ゲルマン系のフラマン人が話しています。歴史的に、フラマン語はフランス語の構文の影響を受けているといわれています。ベルギーの南部には、フランス語を用いるラテン系のワロン人が移住しています。

参考文献

テニスの文化史
　ハイナー・ギルダマイスター著
　稲垣正浩・奈良重幸・船井廣則　訳
　大修館書店　1993年７月５日　初版
テニス500年史
　G・クレリッチ著
　虫明亜呂無　訳者
　日本テニス協会　監修
　講談社　昭和53年３月１日　第１刷発行
新版テニス指導教本
　（財団法人）日本テニス協会
　大修館書店　2005年９月20日　第１版発行
テニス教本
　（社団法人）日本プロテニス協会
　スキージャーナル発行　1999年４月20日第１版発行
協力
　フランス語
　元木淳子工学部教授